

遊びの流れを追って

田中三保子



子ども（たち）が一つの遊びを始める。短い時間で終わってしまうこともあれば、長い間続けられることもある。毎日続くこともあれば、時を経て繰り返し返されることもある。遊びを始めた仲間の間だけで行われることもあれば、輪が広がっていくこともある。遊びは続いていても、それを担うメンバーが入れ替わってしまうこともある。

四歳児の二学期に始まった、「恐竜作り」は一方では同じ遊びとして広がり、他方では、「恐竜」という概念は保ちつつも別の遊びへと形を変えていき、さらには、

「恐竜」も他のものへと移り変わっていった。この一連

の遊びは結局、ほぼ一学期間にわたり継続されていたのであるが、こんなに長く続いていくとは、当初私も予想していなかった。

組にはいろいろな子どもがいる。新しいことにパッととびつく子どもいれば、関心は示しながらもなかなか手を出さない子どもいる。周囲に関係なく自分の遊びに没頭する子どもいれば、ずっと知らん顔をしていて急にやり始める子どもいる。さまざまな個性をもった子どもたちがそれぞれ興味をもったときに、その子らしいやり方で、参加したり、自分の遊びに考えをとり入れたりして、「恐竜」の遊びが継続していった。その様子を追ってみる。

『恐竜作りの始まり』

二学期になって間もない頃、隣の年長組で恐竜作りが始まった。廊下を通ると見える壁ぎわに少しずつ恐竜が増えていく。厚手のボール紙に丹念にクレヨンで彩色された恐竜たちが、両足をふんばって立っている。身の丈四、五十センチはある恐竜が廊下の基地に出現したり、年長児が恐竜に紐をつけて歩いてる姿を見かけるようになった。

「せんせい、恐竜作りたい。お散歩できるのがいい。」ある日、Hが園庭から駆けこんでくるなり言った。よその組で珍しいことがあると目敏く見つけて、一番最初に組を持ちこんでくるのは、いつも彼である。

「そうねえ。」私はちょっとの間逡巡した。年長児と同じものを作りたいと言われても、Hはまだ年中である。厚手のボール紙を二枚重ねて切ったり、広い面積を丹念に塗ったりするには、それなりの技術や力、根気が必要である。いや、彼ならできるかもしれない。組の中では

体力も洞察力もとび抜けている。自分に挑戦してみたい機会かもしれない。でも…他の子どもたちが次々に欲しがったらどうしよう。私がほとんど作ってやることになるだろう。一人の恐竜にかなりの時間と手間を費すことになり、他のところに手が回りかねてしまうのは目に見えている。

「ねえ、Hくん、あれはとっても大変なのよ。切るのも色を塗るのも一生懸命やらないとできあがらないけれど、がんばれるかしら。」「やってみる。」Hは躊躇なく答えた。「それじゃどんな恐竜にするか考えておいてね。」決心して、私はボール紙を取りに行った。

「これがいい。」恐竜の大きさを比較した絵本のページをながめて、Hは、最大の恐竜ブラキオザウルスを指さした。三人兄弟の長兄、五月生まれで組一番の大きな体格の彼にとって、大きいことは素晴らしいことなのだ。私が、大きなボール紙に恐竜の輪郭を書いておくと、子どもたちが寄ってきた。Hは床に座りこんでマジックで色を塗り始めた。まわりの子どもたちは、少し

の間ながめるとそれぞれ自分の遊びに戻っていったが、UとNは色塗りを手伝ったりしている。かなり丁寧に時間をかけて塗りあげると、Hは万能鋏を使って自分で切り始めた。固いので力をこめて切っている。頭部と足の爪のところを除いて一人で切り抜いた。さすがに力がある。反対側の色塗りのときは観衆も助人もなくなつて一人で頑張っていたが、やはり少々雑になつてしまった。二枚の紙の背の部分を張り合わせる。気が急ぐらしく長いテープで一気に張ろうとして却つて失敗してしまう。

殊に丸みのところなど、テープを短くして少しずつ張っていかないときれいにできない。手伝いながら一緒にするうちに上手になつてきた。いつもやりたいことがあると待てずに一人でさっさとやってしまうので、つい任せてしまつて、テープの使い方など細かい部分に目が届いていなかったと反省させられた。私が足を補強し、おなかにマチを入れてやつと恐竜が完成した。「よくがんばったわね。」自分の力を精一杯使つて一日で作らあげられて、Hはさすがに満足そうだった。「ぼくが一人で

作つたんだよ。一日で作つたんだよ。」とまわりの子どもたちにも自慢そうに話していた。

恐竜の散歩用の紐を年長児と同じように首につけた。Hは喜んで引つ張つてみたが、すぐに首を前に落として倒れてしまった。首の長い恐竜である上に、私が絵本の通りに前足を真つすぐ下に書いたのがいけなかつたようだ。初めから引つ張ることを念頭に置いて、前足を前方に後ろ足を後方に傾けたり、安定がよくなるようなデフォルメを考えるべきだつたと思慮のなさを反省した。紐の位置を工夫したりしてみたが、大して改善されないまま帰る時間になつてしまった。あとで、後ろを重くしたりなど試みたが、長い間倒れないというまでにはいかなかった。翌朝、Hは母親に嬉しそうに恐竜を見せると、あとは知らん顔であつた。夢中になつて作るけれど、できあがつたものに再び関心を示すことはふだんからあまりない子どもではあるが、倒れ易くなければもつと使つてもらえたかもしれない。

「恐竜作りが続く」

Hが作った翌日、Mがチラノザウルスを作った。切るの私がしたけれど、楽しそうに、丹念に色を塗りあげた。首に紐をかけてやると、彼は少し引っ張ってみて、満足した様子で恐竜を柵にのせ、外へ遊びに行った。このチラノザウルスは、何日もの間Hのブラキオザウルスと並んで立っていたが、ついには家に連れていかれた。

M夫のチラノザウルスには鋭い歯があることを、Hは目敏く見つけた。「ぼくのにも欲しい。」草食の恐竜には鋭い歯はないことを一応説明したが、ブラキオザウルスも歯をむき出すことになった。

その後AとKが、それぞれ二日をかけてプロントザウルスを作り、すぐに持ち帰った。M子は大きなブラキオザウルスに取り組んだ。一人で黙々と色を塗っていたが、それで一日が終わってしまった。どうしてもいつて未完のままの恐竜を持って帰った。

“お面作り”

お散歩用恐竜作りは私が思った程には広がらず、男児の間ではお面づくりがはやった。自分が恐竜になって遊

ぶ。中でもUは毎日お面をかぶって登園する程であったが、それも一週間で終わった。彼はその後も一人だけお面をかぶって遊んでいることがあり、お面の足やしっぽがちぎれてしまった。その度に「また作って。破れちゃったんだもの。」と言ってくる。ちぎれた部分を一緒に探し出し、くっつけたり補強したりしてまた使ってもらうようにしていると、やっと「直して」と持ってきてくれるようになった。

“小さい恐竜作り”

E子が「このくらいの恐竜がほしいの」と言ってきた。十五センチ程ので散歩用にリボンをつけたいという。E子を見て、女兒が五人、次々と同じ首長竜を作った。E子はできあがった恐竜を大事そうに持ち帰り、また翌朝持ってきた。ある朝恐竜を持たずに来たので、わけを聞くと足がとれてしまったという。翌日持ってきた恐竜を補修してやると、嬉しそうにまた大事にかえて遊び出した。

“N子の恐竜作り”

H子の恐竜から一か月程経った頃、突然N子が「大きな恐竜を作ってください。」と言いにきた。誰ももう作らなくなっていた時なので唐突な感じがし、私は一瞬「えっ」と思った。N子は私からチラノザウルスを受けると、床に腹這いになって色を塗り始めた。その横にE子が小さい恐竜をかかえて座りこんでいる。E子と話をしながら、N子は楽しそうに、少しずつ恐竜の色を塗りすめていった。その様子は他の子のように一気に色を塗っていくのとは少し違っていた。青を基調として、いろいろな色の模様が描かれていく。縞模様やハート、星などがある。余白をたくさん残したまま、まわりを切り始めた。床にベタンと座りこみ、黙々と力を入れて鉄を動かす、とうとう全部を一人で切り抜いてしまった。前足の鋭い爪の部分などもかなり上手に切れている。Hほどの体力があるとも見えないのに、相当な技量と力である。二日目になって、全身を模様で彩られた不思議な雰囲気、恐竜が、ようやくできあがった。そしてN子は大きな恐竜を、E子は小さなのを後方に従えて、二人し

て散歩に出かけていった。この後も時々、N子は恐竜の模様を描き加えていった。大ていE子が一緒に、Uが手伝っていることもあった。そのUが私に言いに来た。「あんな恐竜いないんだよね。」とってもおもしろいよ、きつと。」Uはふーんという表情をした。

恐竜の家

N子とE子が恐竜の家を作り始めた。中積木であまり高くなく周囲を囲い、恐竜を連れて中にはいって遊び始めた。小さな積木の他はあまり使わず、つもりになって遊んでいる。中積木が空いている時には恐竜の家が建てられることが多かった。Uが時々お面を被ってこの家の仲間に加わった。

恐竜のラーメン屋さん

恐竜の家の隣に恐竜のごはん屋さんが出現した。N子やE子とよく話をするが一人で遊んでいることの多いGが始めたものである。Gは紙に茶色を塗り、それをごはんと言っている。子どもたちが買いにきた。特にAはおもしろがって何度も買いにいったが程なく売り切れてし

まった。すると今度は自分で紙に色を塗って作り始めた。すでに家に持ち帰っている恐竜に食べさせてやるからとせつせと作り、「恐竜さん喜ぶかな。」と大事そうに持っていった。

Gはその次に恐竜のラーメン屋さんを始めた。まずマークのついた看板を作りあげると、呼びこみを始めた。子どもたちがやってくると、「まだできてませんからしばらくお待ちください。」と言っている。恐竜しか食べられないとのことで、お面のない子は断われ、友だちに借りたり、作りたいと私のところに来る子も出てきた。Gは呼びこみに専念するばかりで、ラーメンを作る気配はない。ラーメンを食べるつもりで来た子どもたちがりょうろしている。どうやらGには具体的な考えはないらしいので私はまずテーブルを持ってきた。「おちゃわんもいりますね」と言うと、Gが「うん、そうだね。」と言う。ままごのところからお茶わんを借りてきた。ごはん屋さんの時には大きな紙をむやみに使ってしまったので、今度は少し考えてほしいと思った。

使い残しの紙を持ってきて細く切りお茶わんに入れて、「はい、ラーメンです。」と言ってみた。Gも子どもたちもそれをすつと受けとめてくれた。

Yが突然泣き出して私のところにやってきた。ラーメンを食べたくてお金を作って行ったのに、恐竜じゃないからと断られてしまったらしい。「だってYは恐竜になりたくないもん。」と泣いている。ラーメン屋さんに交渉に行くが、Gは難色を示す。彼としては恐竜に食べさせることに意味があったのかもしれない。Yは大粒の涙をポロポロこぼし続け、まわりの子が「恐竜じゃなくてもいいじゃない。」と言って、Gも「じゃあいいよ。」と譲ってくれた。Yはカップ入りの紙切りラーメンをもらって満足そうであった。

そのままこのラーメン屋さんはただのラーメン屋さんになり、時々店開きをした。ラーメン屋さんをする人は入れ替わったが、Uがはいっていることが多かった。自分で丹念に紙を切ってラーメンを作る。十二月の初め、彼はその紙のラーメンを袋一杯持って帰り、その後店は

開かれなかった。

『動物作り』

E子はしばらくの間小さい恐竜で遊んでいたが、今度は「お散歩できるねずみさん作って。」と言ってきた。

恐竜と同じように紐で引く張っている、女兒が次々とねずみやうさぎを欲しがり、恐竜作りは動物作りに変わった。外で遊ぶことの多いU子が珍しく室内にきて一人でかわいいうさぎを作りあげた。E子は次にキリンを作り、その後ラッコが欲しいと言いだした。立ったのではなくおなかに貝をのせているのがいいと言う。まわりをテープでとめ、中に詰物をしたラッコができあがると、E子はそれを乳母車にのせたり、ふとんに寝かせたりして大事な人形としてかわいがってくれた。

『再び恐竜作り』

十一月の初めになって、Uが大きなトリケラトプスを作りたいと言いだした。友だちに手伝ってもらったりして塗りあげた恐竜が完成すると、彼は雨の日にもかかわらず大事そうにかかえて帰っていった。そして翌朝また

持ってきた。このトリケラトプスはしょっちゅう使われて、さしものボール紙もよれよれになりうまく立たなくなってしまう。ちょうどその頃、K介、N、Mが同じトリケラトプスに取り組んでいた。Uは「ぼくにも新しいの作って。だって変になっちゃったんだもん。」と言ってきた。私はまた裏打ちしたり補強したりしてUに渡した。この恐竜は二学期の終わりまで活躍し、最後に連れて帰られた。

子どもは自分がやりたい時にやりたいことに取り組むとかかなりの力を発揮する。そして充分遊んで満足すると、また新たな遊びの発想を生み出してくれるものである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)